

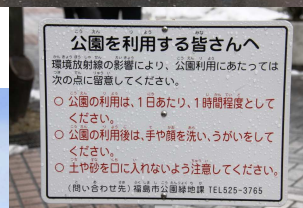
福島県PTA連合会・宮城県PTA連合会・仙台市PTA協議会

石巻～女川～仙台～亶理～相馬～福島/国見

訪問の記録

2012年3月10日(土)～12日(月)

絆



大阪府PTA協議会

復旧・復興の現状を知り、将来に向け私たちが心掛けないといけないことは



東日本大震災における被災地の復旧・復興の現状把握のための
東北訪問団の結成と派遣について

大阪府PTA協議会

2011年3月11日（金）、14時46分、東北地方太平洋沖地震発生。

翌12日（土）、大阪府PTA協議会（以下、府P）の役員会・市長村会長連絡会議にて、災害義援金の募金活動の実施と「大阪府PTA協議会災害時等基金」の一部を取り崩し義援金に充当することを決定し、大阪府下の各市町村PTA協議会（連絡会）（以下、各市町村P）に募金活動への協力をお願いをしました。

また、今までに府Pへ寄せられた義援金全額を日本PTA全国協議会（以下、日P）へ送金し、被災地の各PTA協議会（連絡会）へ寄附をおこなってきました。その後も各市町村Pでは、現在にいたるまで引続き積極的に募金活動を行っていただいているところです。

この間、府Pでは、現地PTAへの支援として募金活動以外の活動はできないのか、現状を知ることができないのかなど他の支援について模索してきました。そんな中で、当時の状況や現状をテレビ・インターネットなどで情報として捕らえるだけではなく、実際の状況を自らの目で見、耳で聞き、肌で感じ、知り得た状況を正確に伝える事ができるのではないかと、・・・「津波」って？「放射能」って？学校が無くなり別の学校に通う子ども達・・・現在も続いている子ども達の辛さを感じることができないのか・・・

さらに、大震災の発生から、1年が経過し月日とともに遠く離れた私たちの頭の中からはあの甚大な被害さえ消え去ろうとしています。・・・阪神・淡路大震災からも17年経過し、あの時の教訓を覚えているPTA会員も少なくなってきました。

そのような中で、東北の各PTA協議会（連絡会）へ訪問させていただきたい旨の相談をさせていただいたところ、どこのPTAからも「是非ともお待ちしております。そして、現状を知っていただき大阪の皆さんに伝えて欲しい」との熱い、熱い返答をいただきました。

そこで、現地のPTAの皆さんがこの1年間がんばってこられた姿や今までの様々活動、現状の課題を知るために現地PTA協議会（連絡会）を訪問し、その経験を今後のPTA活動に活かす事としました。

目 的：東日本大震災から1年がたち、この間の復旧・復興の現状を知るとともに将来に向け私たちが心掛けないといけないことを学ぶ。

日 程：3月10日（土）～12日（月） 2泊3日

訪問先：福島県PTA連合会・宮城県PTA連合会・仙台市PTA協議会・国見町PTA

ここに、今回の訪問の記録として、初めて震災後の東北を訪れた感想や“こころ”に残った印象などをまとめ、残すこととしました。この記録を通じて「東北の皆さんの“おもい”」を少しでも感じていただければと思います。

また、この記録を各市長村Pで活用いただき、東北の現状を忘れずに被災地の支援を今後も行っていきたいと思いますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、3.11と言う大変忙しい時にも関わらず快く受け入れていただいた宮城県PTA連絡会・仙台市PTA協議会・福島県PTA協議会および国見町PTAの皆さんに厚くお礼を申し上げさせていただきます。

【参加者】

大井 敬雅	岸和田市・大阪府 PTA	岡橋 泰之	東大阪市 PTA
姫野 國廣	柏原市・大阪府 PTA 事務局	川村 早余子	門真市 PTA
永井 忠孝	吹田市 PTA・大阪府 PTA	三浦 貴子	摂津市 PTA
福川 妃姫子	枚方市 PTA・大阪府 PTA	畑井 美紀	摂津市 PTA
宮川 玲	八尾市 PTA・大阪府 PTA	山本 幸生	高槻市 PTA
小垣内 潤子	八尾市 PTA・大阪府 PTA	佐村木 正和	堺市 PTA

【日程】

日	旅程		
1 日目 10 日 (土)	～7:00	集合	12 名
	7:25	JAL2201 普通席：大阪(伊丹) 07:25 発 ⇒ 仙台 08:40 着	大井・永井
	9:30 頃	福島に向け出発 仙台空港～岩沼～相馬～福島	姫野・福川
	14:00 頃	福島着	宮川・小垣内
	14:45	福島グリーンパレス	岡橋・川村
	15:00～	福島県 PTA 連合会との懇談（交流）会 福島県 PTA 連合会との懇親会～夕食	三浦・畑井
		福島【泊】	山本・佐村木
2 日目 11 日 (日)	① 仙台班	福島（出発）	6 名
	8:30 頃	国見町着	永井・宮川
	12:30 頃	<伊達郡国見町 PTA との交流：吹田市 PTA 交流先> 国見町～<東北自動車道>～仙台 13:30 頃着 仙台市内・荒川小学校視察 東日本大震災仙台市追悼式典：14:20～16:00 頃 ～仙台国際センター（青葉区青葉山）～	小垣内・畑井
	17:00 頃	仙台駅着	岡橋・川村
	17:29(17:57)	仙台駅発～仙台空港線	帰阪 2 名
	17:52(18:21)	仙台空港着	宮川・小垣内
	19:05	ANA740 普通席：仙台 19:05 発 ⇒ 大阪(伊丹) 20:30 着	
	17:30 頃	ホテル JAL シティ仙台【着】	
	②石巻班	福島（出発）～<東北自動車道（富谷ジャンクション）・三陸自動車道> ～石巻・女川 11:00 頃着	6 名
	8:00 頃	女川～大川小学校～	大井・姫野・
	11:00 頃	石巻市河北総合センター（ビッグバン）着	福川・三浦
	14:00 頃	石巻市追悼式：14:30～15:30～河北総合センター（ビッグバン）～	山本・佐村木
	14:30	石巻～松島～塩竈～	
	15:30 頃	仙台着	
	17:30 頃	宮城県 PTA・仙台市 PTA 役員懇親会	
	18:30 頃～	仙台【泊】	10 名
3 日目 12 日 (月)	8:30 頃	仙台（ホテル）出発	大井・永井
	AM	石巻市内	福川 姫野
	PM	松島・瑞巖寺・塩竈～名取市・閑上地区～仙台空港	岡橋・川村
	18:00 頃	仙台空港着	三浦・畑井
	18:55	JAL2216 普通席仙台 18:55 発 ⇒ 大阪(伊丹) 20:30 着	山本・佐村木
	20:30	大阪空港着・解散	

今をいきるひとへ

～「3月11日、あの日」・「地震・津波」・「放射能」～

大阪府PTA 大井 敬雅

約8ヶ月振りの東北訪問、遠くから見る海岸沿いの被災地はずいぶんと綺麗になり本当にここが被害を受けた場所なのだろうかと思ってしまう。しかし、目をよく凝らしてみるとそこには確かに家の基礎だけが残し、そこには確かに街が存在していた事がわかりました。

一方、一面に広がっていた「がれき」は一箇所に集められ山積みになれ近づくにつれ異臭が強くなっていきます。

女川などの狭い谷あいの村では、港から谷の奥の方まですべての建物が消え去り、街全体が消失・・・、津波がすべてのものを呑みこみ持ち去ったあとの情景のみが残されていました。



海岸線に沿って津波の被害を受けた街、そこに残された風景からはまったく生活感が消え去り本当にここに人が住み暮らしていたのだろうかと思ってしまうほどです。

今回、主に津波の被害を受けた石巻～相馬市の海岸線沿いを訪ねましたが、ほとんどの場所で学校の校舎や病院などの鉄筋コンクリートの建物だけが残され、その建物も2階・3階まで被害を受けいまや廃墟となっています。そんな情景を見ていると、自然に「口数」が少なくなり、何も言えない虚しさに苛まれ、そんな自分自身に苛立ちを覚えてしまうほどでした。



また、多くの児童・生徒が帰らぬ人となった大川小学校をはじめ、雄勝中学校・石巻市立女子高校・荒浜小学校・関上中学校・県立農工・荒浜中学校・山下第二小学校・中浜小学校・・・など、これらの多くの学校で児童・生徒が被害を受けたことを忘却の彼方におくことは決して許されるものではありません。

次に、決して「今をいきているひと」の事を忘れてはいけないということをあらためて実感しました。3

月11日、あれから1年。被災地で亡くなった方に思いをはせ花を手向ける人・かがみこみ手を合わせる人の姿などを多く見ました。「今をいきているひと」のそんな姿を見るたびに、きっとこれからの夢・希望をいだきながら過去の思い出とともに過酷な生活を乗り越えようとしているのではないかと思います。

福島では、いまだに収束方向が見出せない放射線問題により多くの人がこの国難を克服しようとがんばっておられます。まだまだ多くの児童・生徒が母校を追われ、窮屈な学校生活を送っているという実情と、未だに福島県外からだけではなく県内においても風評被



害が多く“こころ”の被害を受けているという事実が存在していることを知らされました。農作物



への原発問題だけではなく人体への放射線の影響に対しよからぬ放言がなされるなど決して許される事ではありません。福島では、この災害が終焉し、復興に動いているのではなく現在も進行しているという事実を再認識するとともに、私たち自身が放射線問題について正しい知識を学び福島がおかれている状況を正視する必要をつくづく感じました。

最後に、あらためて東日本の子ども達を含めがんばっている「今をいきているひと」を大切に、見守り、私たちができる支援を引続き行うことの大切さを実感するとともに、初めて訪れた11名のメンバーにとっても感慨深く有意義な4度目の訪問となりました。

東北訪問団に参加して

～前向きで力強く生きられている～

東大阪市PTA 岡橋 泰之

まず、はじめに今回東北訪問の機会を作っていただいた、大阪府PTA協議会の事務局、大阪府PTA会長に心より感謝いたします。

私が、今回この東北訪問団に参加させていただいた理由はテレビや新聞などで悲惨な光景を目の当たりにして私に何か出来る事は無いか、何をすべきかと震災直後から自問自答する日が続き、その答えを見つけようと思ったからです。

実際、仙台に着いてすぐ目にした光景があまりにもショッキングで、本当に足を踏み入れてよかったのかと思いましたが、福島、宮城の各PTAの方々と話しをしているうちに、この東北の現状をより多くの人に伝えるということが、訪問した意味だと気がきました。

福島では放射能が原因の風評被害や間違った認識などで二次被害や三次被害が有ったり、仙台ではあの広大な住宅地が一瞬にして津波にのまれ想像を絶する光景を見たり、手つかずの瓦礫の山を見ていると正直辛かったです、唯一の救いはお話させていただいた全ての方が前向きで力強く生

きられており、その姿を見て心が落ち着きましたし、何か私が逆に力をもらったような気がしました。

今回参加させていただいたことによってこんなに距離がある東北地方がすごく近付いた様に思いました。次回機会があればまた参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。



心でつなげる“絆”

～時が止まったままの風景～

門真市PTA 川村 早余子



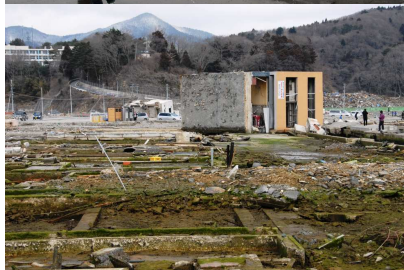
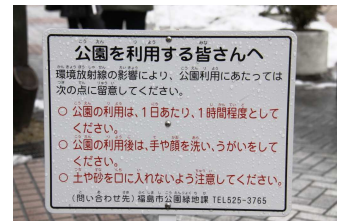
壊れたままの家、流れ着いたままの船、天井が落ち、壁が崩れ、使えなくなってしまった学校……。海岸沿いはどこまでもガレキの山が続いている。

東日本大震災から1年。宮城・福島を訪れたが、報道で目にするのとは違う、時が止まったままの風景がいくつもあった。

福島の放射能被害は想像していた以上に深刻で、私たちの浅はかな判断と行動が、福島の人たちの心を、子ども達の未来を、傷付けている。福島が“フクシマ”として差別されることのないよう、将来、出会うかもしれない子ども達が背を向け合うことのないよう導いていく事が、被災者の声を聞いた私たちの役目だと痛感した。

福島・宮城ともに、共通の願いは『私たちの事を忘れないで！』みんなが笑顔になるその時まで、1人でも多くの人たちと、東北を想い続けたいと思う。

【追伸：日曜日に小学校校区で“ふれあいまつり”という大きな行事がありました。そこで、被災地訪問の写真など震災パネルを作り、展示しました。紙を置いておいて、応援メッセージも書いてもらいました（寄せ書きにして、送らせてもらおうと思って）。当日は、門真市教育長やケーブルテレビの取材、府議会議員もパネル展示を見に来てくれました。多少なりとも、何か伝えることができたのではないのでしょうか。】



東北を訪問して

～私たちは忘れてはいけない～

八尾市PTA 小垣内 潤子

平成23年3月11日 東日本大震災。あの日からちょうど一年。大阪府PTA協議会の派遣隊の一員として、福島、宮城の両県を訪問しました。ニュースで見た、冠水し滅茶苦茶になっていた仙台空港は整備され、東北の玄関口として立派に復活していました。



でも、一步外に出ると周囲には何もありません。レンタカーで走っても何もありません。田畑なのか住宅地なのか、一年前までそこに何があったのか想像することすらできません。ガードレールやカーブミラーも曲がったままで、あるのは瓦礫の山だけ。たまに出てくる家は、1階ががらんどで2階の窓にはベニヤ板が張られていました。雪が降っているせいでしょうか、町の全容はわかりませんでした。はじめ驚きの声をあげていた私たちも次第に無口になり、只々無くなってしまった町を見つめていました。



しばらくして、亘理町立荒浜中学校に立ち寄ることができました。校門のコンクリート壁は倒れ、シャッターはめくれあがり、渡り廊下の屋根が落ち、破壊された校舎。体育館には1年前の『祝 卒業式』の文字があり、その時の瞬間を思うと胸がしめつけられます。床はギュッと押されたのか、板と板が互いにせり上がるようになって、三角の山が波のようになっていま

した。

山元町立中浜小学校にも行きました。運動場には、スクラップになってしまった車が積み上げられ、タイル張りのピロティには壊れた時計が落ちていました。何年も子ども達を見守り続けた校庭の時計。この時刻に津波が襲ってきたのでしょうか・・・胸が苦しい、とても苦しい。波にさらわれた人々を思うと、本当に苦しくなってくるのです。



校舎の8m位の所に津波の高さを示すプレートがありました。学校が海に沈んだ印です。校舎の中は、大きな手で捻られたみたいな感じがしました。歪み、碎かれ、潰される。前日まで子ども達が走っていたであろう廊下。明るい笑顔であふれていた教室。声が聞こえてきそうで、喉の奥が熱くなり、涙がこぼれます。声もでないまま息をつめて校内を歩き、外に出てやっと「はあー」とため息がつけ

ける感じでした。

それでも光のさす場所もあります。オアシスのような直売所です。魚・野菜・くだもの・花・加

工品・パン・・・色々なものがありました。中でも注目は『ほっき飯』でコリコリと歯ごたえのある貝が入っていて、とても美味しかったです。買い物をすることも復興の手助け。お土産は大事です。



福島に入ると町は静かで、私たちが見たところでの建物の倒壊はありません。でも、子どもの姿が見当たりません。立て札がありました。『公園を利用するみなさんへ。環境放射線の影響により(中略)公園の利用は1日1時間程度として下さい。』これが福島の現実。唇をぐっとかみしめました。

福島県PTA連合会との交流会では、知らない情報というより伝わっていない思いを知る事ができました。どれだけ多くの言葉を使っても伝えきれない、どんな表現を用いても思いの半分も表せないもどかしさ、悔しさのような心のうねりを感じました。



被災三県（岩手、宮城、福島）のうち、福島県だけが『フクシマ』と表記される悲しさ。車のナンバーを他県のナンバーに変える、隣県の山形に行って、車に『カエレ』と傷をつけられる。親が神経質になって、夫婦喧嘩→学校→PTA→行政へと怒りの矛先が変わり、避難派VS残る派の対立ができる。東北同士での傷つけ合いに疲労困憊・・・子ども達の2年後の精神崩壊が心配だとおっしゃっていました。除染についても校庭は表土を削って埋めるだけ、校舎内はお母さん達が拭き掃除、でも肝心の通学路は手つかず・・・運動できないので、幼児は食欲がなく背が伸びず、大きい子達は太り不健康に。次から次へと出てくる難題に福島県は被災したというより、被災中なのだと思います。

子ども達をとりまく状況に涙し、深刻な表情をする私たちに力強く「私たちは福島に住み続けます」と誇らしげにおっしゃいました。他府県に住む私たちに望むことは、「福島を忘れないで欲しい!」ということ。絶対に忘れません。

今回、大阪人でよかったなあとつくづく思いました。それは、大阪人が普通に会話するだけで、笑って喜んでくださるのです。大阪弁が標準語だったら、よかった!とさえ言っていただき、来てよかった!と心から思いました。

翌日、吹田市と交流されている国見町立県北中学校に行きました。玄関を入ったらホワイトボードに本日の放射線量が学校の場所ごとに書かれていました。やはり、運動場は教室よりも高く、窓際と廊下側でも差があるので席替えを頻繁にするとのことでした。

今日の放射線量

＜フロンティア
会館＞

平成24年3月9日

校舎

体育館

柏体

校庭
(中央)

校庭
(南側台)

校庭
(北側側台)

1F

2F

3F

10:00

0.053

0.055

0.046

0.069

0.077

1cm

0.122

0.137

0.135

1m

0.139

0.125

0.123

昨日の積算放射線量 8:00~18:30

1μSV

互いの思いを語り合った母親同士の話は熱のこもったものになりました。クラブの大会に行っても、福島県とは試合をしてくれない。今は雪があるので放射線量が低いけど、雪解け水が田畑に入るので、影響が怖くて作付けができない。辛いことばかりなのに明るく話して下さるお母さんたち・・・子どもを思う気持ちはどこの親も同じです。「福島の子子ども達を可哀想と思わないで欲しい、何もかわりはないのだから・・・」この言葉が胸の奥

に深く残ります。話は尽きず、最後は抱き合って別れました。

福島県で感じたのは、皆さん現状を受け止めて、その上で前に進もうと努力されていることです。『被曝』。これは人災だと思います。風評被害も人災。人間って……。でも、人間がんばれ！ 私たちががんばろう！



仙台の慰霊祭に向かう途中、荒浜小学校に立ち寄りました。何度もテレビに出てきた津波の象徴的な小学校。教育委員会の方が特別に中に入れて下さいました。生徒の女の子が亡くなったので、正門には花が置かれていました。校庭はバイクの山。階段の壁は茶色と白のツートンになっていました。そこまで津波がきた証拠です。黒板には女の子へのメッセージがありました。校舎のあちこちに卒業式の飾りが残り、私たちが立ち入ってはいけないような気持ちになり、いたたまれ

ません。地震前の航空写真で見ると、学校の周りは住宅地で環境のよさをうかがい知ることができます。あの日からすると、ずいぶんきれいになったとおっしゃいました。きれいなのは何もないからです。海まで何もない。以前は防風林の役目を果たしていた松林が津波で流され、凶器となって町を破壊したのです。



海辺に行くと、お線香のにおいがしました。3月11日。私たちが祭壇に手を合わせましたが、やはりこの場にふさわしくないような気がして申し訳ない気持ちになりました。海をじっと見ていると、これまでの全ての感情を見透かされているような、つつまれているような不思議な感覚にとらわれました。不謹慎なようですが、これが自然の持つ力。基礎だけになってしまった家のあとには、いくつもの黄色いハンカチが三角テントのようになって、なびいていました。どうかご無事で……



言葉もないまま仙台市の追悼式典に参加しました。遺族でもない私たちが参列していいのだろうか……というためらいもありましたが、失われた命を悼む気持ちを捧げることができればと思いました。

会場近くの青葉城跡から仙台市を見ると何もなかったかのように賑わっています。でも、海の方を見ると煙突から煙があがっています。瓦礫を処理する煙。寂しげに揺れる煙。

今回、私たちは画面では伝わりきれない現状を見て、知らなかった思いや声を聞き、心を揺さぶられ続けました。まだまだ支援金は必要です。でも、何よりも被災地という地名ではなく岩手県、福島県、宮城県という日本の東北に足を運ぶことが、私たちにできる復興を支えることへの第一歩になると思いました。私たちは忘れてはいけないのです。そして考え続けなければいけないのです。



「助け合い」の心を忘れず

～子供たちの笑顔のために～

堺市PTA 佐村木正和

東日本大震災からちょうど1年。地震と津波によって被災して、瓦礫に埋め尽くされたであろう土地には、もはや瓦礫はきれいに取除かれ、基礎だけが残った宅地と、水田や畑とは思えない荒れた土地が見渡す限り広がっていました。海岸に近い荒涼たる景色の真ん中の幹線道路走りましたが、たまに行きかう車はほとんど大型トラックで、日頃私たちが体感している人の気配は全くありません。

そんな中に、鉄筋コンクリートの建物が残っていました。それは学校でした。体育館の床板はめくりあがり、校舎の2階の天井板も垂れ下がった状況は、もし、ここに、子供や先生がいたならどうなっていたかの選択肢を全否定するに十分なものでした。

福島、宮城、仙台のPTA協議会の皆さんと交流させていただきました。多くの情報、示唆に富むご意見を聞くことができました。ちょうど1年という、大変お忙しいタイミングに貴重な時間を作っていただいたことに感謝いたします。



大阪府PTA協議会という組織体の活動として今回の訪問が実現しました。単Pから始まる市P、府（県）P、ブロックP、日Pというピラミッドの形をした組織が、今回重要な役割を果たしたと思っています。情報を集め、交換して、整理し、活用する。人との交流で、話をしたり、聞いたりする。これらは、気持ちを落ち着かせたり、癒すこともできます。



また、気持ちを一つにして、前向きに奮い立たせることもできます。今回、地震津波を経験してはじめてわかったことがたくさんあります。幸いなことに、我々人間は、社会的なものとして、他人の経験を共有して、同じ失敗を繰り返さないようにできるものです。

福島県いわき市の中学校校長会が作られた、校長、教師、保護者、生徒、地域の方々の声をまとめられた「教育実践記録」は、多くの課題や解決法や問題点を記録としてまとめられたもので、とても貴重なものだと思います。こういった情報や記録は、それぞれの協議会等が中心になって集められ、その小さな枠組みの中だけで活用されるのではなく、日本中に、その体験された中での活動を広めていただき、それを共有できるシステムを構築することが重要です。我々も含めた被災していない協議会が、義援金だけでなく、そういう活動の共有に向けてのお手伝いに取り組む必要性を感じました。



被災された方々やご遺族に、心より、哀悼とお見舞いを申し上げますと共に、私たちは、特に子供たちの笑顔のために、「助け合い」の心を忘れず、出来るだけの支援をしていきたいと思っています。

「ゆっくり見守ってください」

せめて忘れないで欲しい…

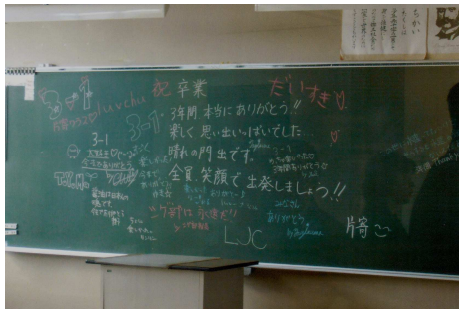
吹田市PTA 永井 忠孝

3月10日（土）仙台空港からレンタカーを借りて被災地に入る。使われていない小・中学校を見学しながら、道中テレビのニュースに出ていた様な風景を直に見て「家造り」をしている私にはつくづく津波の威力に対して無力感と恐怖を覚えながら福島に着きました。



福島県Pとの懇談会では、福島県P事務局長から今までの歩みをレクチャーして頂いた後、福島県P会長が様々な思いを語ってくださった。中でも政府の発表が遅かった事に対して、『スピーディのデータ開示があれば混乱せずにスムーズに非難できたと思いますか？』の質問に対して、「恐らく大丈夫だったと思います。避難の際、ほとんどの人は情報が限られている中『町役場に集合してください』とだけ聞かされ、着いた途端にバスに乗せられて移動

しましたから…」、確かに線量の少ない地域の住人が多い地域に移動させられ、結果的に無駄な混乱を増やすだけだったのは聞き及んでいる。



そして、現在県内で給食調理ができず、冷凍給食が出されているがあまりにも酷い給食に憤り、嘆願をしたが、「平等性を欠くので補助金の増額は出来ない」と財務省に言われたことなど、今まで想像もつかなかった話をお聞きした。

また、熊本県水俣市との交流が始まり、水俣市では水俣病の風評被害に55年たった今でも苦しんでいるため、「訴訟問題や差別、偏見で福島の皆さんには、水俣と同じ道を歩んで欲しくない、水俣の経験を生かしてください。」「他人は変えられないから、自分達が変わる。」「子どもたちが県外に出た時に風評に負けない強い心を育てましょう。」「水俣の地から福島を見守り、遠く離れていても心は1つです」と素晴らしいエールを送ってくれたとのこと。PTAのつながりの奥深さを感じ、同じPTAに携わる者として誇らしく、うれしく感じました。

福島県P副会長さんは「私達だって放射能は怖いし出来るだけ子ども達を放射能にさらしてはいたくは無い。放射能に対しての勉強もしているし、線量計の数値を確認しながら、学校や通学路の除染をして生活している。当然、子どもを連れて県外に引っ越しをされる方もいるし、それが可能な方は引っ越しされる事が最良の対策だと思います。ただ出来ない状況の方や逃げたく無いって思いが強い方、様々な思いがあるのに…」と悔しさを話されました。



さらに、福島県P母親代表の「子ども達が無気なく発した言葉ですが『どうせ私達は子どもを産んじゃ駄目なんですよ』って話しているのを聞く事があり、私自身の胸を締め付けられ、悔しい、

情けない気持ちにもなりましたが、他の都道府県の方をお願いしたいのは、今までのご支援のお礼と、これから立ち直るために、私達が頑張るために、せめて忘れ無いで欲しい…」と話された時は、共感し身に積まされて涙しそうになりました。

最後に、福島県Pの会長の発言に何度も「ゆっくり見守ってください」と云われたのを聞き、周りに「頑張れ、頑張れ」って言われ続け、その事がプレッシャーに成っていると感じ、いたたまれなく思えました。



翌日、国見町に。事前の国見町の会長との打ち合わせでは、『何も気を使わないでください。堅苦しくしたく無いので、普段着で行きますし、役場で会うより学校でお会いして、少し学校の様子を見せて頂けたら嬉しいです』とお願ひしていたのだが、到着してみると校長先生や国見町のPTA役員の方々や地元紙の取材を入れ総勢20名を越える人達で出迎えてくださいました。また、時折目元にハンカチを当て「こんなに嬉しい事は…」と。

国見町では下水道の被害が大きく、いまだ完全復旧には至らない事、主力産業の農作物（ももや柿）の収穫も出来ず悔しい思いをされている事や、除染の為に運動場の土の表面をはがしたが、処理する場所が無いため運動場に深い穴を掘って埋めている事、それを「時限爆弾」と呼んでいる事、各校運動場に常設の線量計が設置され毎日様々な場所の放射線レベルをはかり、数値を校舎入り口のホワイトボードに記されている事など、こちらに来て見なければ考えもつかない事が沢山ありました。

別れ際「少しですが持って帰ってください。」と名産の桃で作った『ピーチワイン』を差し出された際に、「いやお気遣い無く」と断ろうとすると「心配しなくても震災前に作ったものですから…」と言われ、風評を気にされている姿を目の当たりに酷く胸が痛みました。

その後、仙台市Pの会長から「荒浜小学校の見学許可を取ったので…」とお誘い頂いたので国見町を後にして津波で町がすっかり無くなってしまった^{ゆりあげ}閑上地区の風景にいたたまれない気持ちになりながら荒浜小学校に。その後、海岸に行くと祭壇が用意されていたので御焼香させていただき、仙台の復興ではない、発展を御祈念させていただきました。



仙台での追悼式の式典後、せっかくの機会なので、青葉城跡に足を向け、やっとの思いで登りきると仙台市内から海辺まで見渡せましたが、ただ遠くに見える瓦礫処理の煙が「絶景」とは言わせてくれませんでした…。



宮城県P、仙台市Pの役員の方々との懇親会で、「今日は珍しく我が家のテレビが消されていました。」と言われ、私ですら、この2日間だけで胸が詰まることも多く、正直もう悲惨な状況を見たく無いと思ったのですから、家族や友人を失った子どもはなおさらだろうと思いました。宮城県Pの母親代表の「震災直後5日間は、被災者が体育館に来ているので、申し訳なかったけど学校に行く事も出来なくて…夫は職場が仙台空港の敷地内で、子ども達と家を守るだけで精一杯だったので…」と言われました。

最終日、石巻へ。基礎だけが残り少し生臭い中に「がんばろう石巻」と書かれた看板が立っていました。瓦礫の山、野ざらしで積み上げられた車を見て「受け入れ反対」を声高に言う人の神経がますます理解しがたくなりました。『放射線の不安があることは十分理解できるが、広島、長崎は兵器として原爆を落とされ、それでも生き延びて語部として活動される高齢者を修学旅行で見てきたらどう。ましてや、種類によって



は150年以上放射線を出し続けるのだ。まだ戦後60年ちょっとだと考えれば何を神経質に訴えているのか?』と言った事がありますが、実はかなり私自身も行政の手口を考慮すれば不安があるかも…と思いながらでした。今なら石原都知事のような無茶なやり方ででも押し通すべきだと思います。

石巻から松島に、「観光するのも復興のお手伝い」と昨日帰阪された2名をのぞく10名で観光、この3日間心揺さぶられる事の連続だったので、訪問団の一体感が高く、家族の様な距離感で時には失礼な事でもズケズケ言い合いながらワイワイ楽しく食事を楽しみ、五大堂をみて遊覧船に乗り瑞巖寺めぐり、お土産を買い楽しく過ごしました。

この旅行ほどPTAの奥深さを感じ、携わる者として誇らしく思えたことは無い。また、東北の為、今回知り合った方々の為に、出来る限りがんばろう！



東北にて・・・

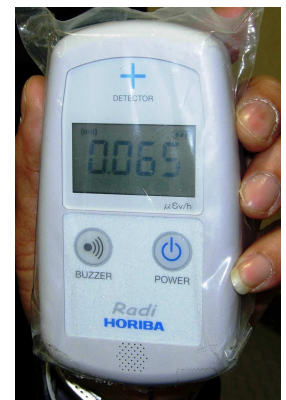
摂津市PTA 畑井美紀

仙台空港から福島へ向かう道々、まだまだ復興には時間がかかると痛感した。がれきの山や、柱だけ残った家、水の高さが記された学校などを見て、映像とは違う怖さを感じた。

すべて流された土地に、船がところどころ乗り上げていて、9月から変わってないと聞き、義援金がまだまだ必要だと思った。

でも私が一番感じたのは、放射能の怖さだ。地震・津波はもちろん怖いですが日に見えない放射能、被爆によっておこる差別を聞いていると、悲しさでいっぱいになった。

そして海の側での慰霊祭に行つたとき、わけもわからず涙が溢れた。早く子供たちにストレスのない生活が来ることを願う。



3 日間の東北訪問を終えて…

枚方市PTA 福川 妃路子

3月10日、現地は雪、空港でレンタカーを借り、まずは福島を目指し海岸沿いを南下。

雪で視界は悪かったのですが、道路沿いのフェンスや電柱が曲がり、海岸沿いの木は、陸に向かってなぎ倒されそのまま放置されていました。所々に、全壊した家や倉庫などが見受けられ、更地になっているところも近づくに家の基礎が残っており、ようやく「ああ、ここに家があったのだ」と認識できました。

亙理町立荒浜中学校での津波は1階だけだったようですが、体育館の床はめくれあがり、水が入るとこんな風になるのか・・・と改めて実感しました。そんな体育館に残された「祝卒業」の看板が痛々しく感じました。



次に訪れた小学校の校舎では2階の窓が無く、建物全体が被害を受け、中はどこを見ても悲惨な状況でした。そして、2階外壁には、津波が到着した高さのところに青いプレートが貼られており、正面玄関前にあった時計は、津波に襲われた時刻で止まっていました。



さて山を越して福島市に到着。福島県PTA連合との懇談会では、沢山の資料や原発関連の新聞の記事などを用いて説明をしていただきました。ある地方紙には、「第1原発付近の今日の天気と風向き」が毎日掲載されており、風向きと放射線の飛散について考えさせられました。中学生版と小学生版の「放射線について考えてみよう」は、県内の子どもたちに配られ放射線についての勉強をおこなっているとのことでした。これをぜひ全国の子どもに配布して放射線について正しい知識を身に付けてほしいと強く訴えられました。



そして、いわき市の中学校校長会が作成した東日本大震災教育実践記録には、震災の危機に直面した中学校の状況など実際の言動が記録されており、事実を伝えるだけではなく、「生きる力」を教える教育に生かしていかなければならないなど、将来に向けた記録となっていました。

懇談の中で、「福島での除染はまだ出来ていない、学校の校庭しか除染作業が出来ていない。」また、「避難している学校の中には、7つの学校で1つの校舎を使っているところもある。子どもが増えても体育館や理科室、図工室などは1つだけ。子どもの学習環境は最悪。学校も授業の振り分けなどが大変。」など、学校の苦悩もまだまだだと思い知らされました。

また、「子どもは元気だが、親が神経質になっており、親の了解をもらった子どもたちだけが昼休みに30分ほど外で遊べる。子どもは学習ももちろんだが、体力の低下がすごい。1日に3時間しか外に出られない。体育館も十分に使えない。夏以降骨折が増えている。運動不足と、太陽にあたらな



なのでは。小学生は運動しないから太る。幼児は逆に動かないので食欲が出ず、小さくなった(大きくならない)。」との話は、母親として身につまされました。

風評による偏見や差別、「福島ナンバーの車は駐車お断り」とか、「福島から来たという宿泊が断られた」・・・事案が起きているとの説明があり、一番怖いのは正しい知識を持たずに排除しようとする事なので正しい知識をもっといただきたいと強く主張されていました。

実際の線量計も見せてもらいましたが、やはり窓側の線量が高くなるとのことで、子どもたちへの影響を少なくするために頻繁に席替えをしているとのことでした。広島、長崎では、60年前の原爆の放射能はまだ残っているといわれ、原爆の何10倍と言われる今回の被害は、いつまで続くのでしょうか。



さて、実際の福島での被災の状況を説明いただいた写真には、校庭にうずたかく積まれた汚染土・それにかけてあるブルーシートや砂やホコリに放射線がくっついていることもあるので、子どものために下駄箱・窓枠を掃除している保護者の姿もありました。

次の日、3月11日は石巻・女川へ海岸線に沿って北上。今日は、石巻の追悼式に参列予定ですが、途中被害の大きかった大川小学校を訪ねお線香をあげました。石巻から追悼式場に行く途中の更地になっているところでは喪服を着て花束を抱えた人たちが集まって手を合わせている光景が多く見られました。



宮城県PTA連合会と仙台市PTA協議会との懇談会では、仙台では3月11日の地震より、その後の余震の被害が多かったということで、福島とはまた違う話を聞くことができました。

帰りに仙台市PTA協議会の会長が案内してくれた商店街のアーケードには、仙台市内123校の小学校と64校の中学校で作った応援旗が飾られていました。

3月12日は石巻の手前の方の海岸沿いを回り、何回も紹介されている「がんばろう！石巻」の看板を見つけました。いろいろなところに巨大なガレキ置き場も見え、まだまだ復興とは程遠いようです。

やはり、現地に行かないとわからないことは、たくさんあるな・・・と気づかされた東北訪問でした。そして「もう1年、だけどまだ1年」の言葉が身に染み、1年も経ったのに、なぜまだこの段階なのか、私達にも何か出来ることがあるのではないかと考えた東北訪問でした。福島の問題は、また次元が違うのだけど、子どもや保護者が犠牲になっているのは確かなことで、ここでも私たちができることは何だろうか、考えてしまいます。ただ、現地の人は皆明るかったことと前向きに生きておられることに少し救われた気がしました



震災から一年に当たるこの日に、果たして行っていいのかどうか、迷いもありましたが、行って本当に良かったと思います。今回の東北訪問で得たものを大阪で生かすことが出来れば・・・

願わくば、本当の復興が1日でも早く行われますように・・・。

「伝え続けること」

～自身が打ち砕かれた瞬間～

摂津市PTA 三浦貴子

この度、東北訪問団として参加させていただいたことは、人生感を考え直すことになったといっても決して過言ではなく、視察させていただいた3日間の一日一日、自身が感じたことはマスコミ報道で知っていたつもりの自身が打ち砕かれた瞬間にも感じた程あまりに大きすぎる衝撃を受けました。

今後、どの様に伝える事ができるのか、何をどれだけのことが出来るのか、このことを今後の課題として今回、現地で知り会えた人々との絆を大切に復旧・復興へ向けての情報を伝えていかなければいけないと強く思いました。

各地での情報交換時、どの地域の方々にも皆さん同じ事を話されていた「このこと東日本大震災を決して忘れず多くの方に伝えて続けてください。」という事。福島では、今すでに風評被害による偏見や差別があり見えない恐怖、将来への不安を感じながら生活を送っておられる今、私達が現状を理解し正しい知識も持ち今出来る事を実行していくことが大切なことと思いました。



【2011年5月宮城県・閑上地区周辺】

家屋やがれきも撤去され、今ではまったく異なる風景となっていました。



東北訪問を終えて

1年たっても光を見出せない

八尾市PTA 宮川 玲

この二日間の東北訪問の宮城県・福島県の被災に対する思いをまとめました。

まず、現地で撮った写真の整理をしていて、二県ともに共通しているのが、驚いたことは時系列で並べてみないと写真の撮影場所が、全く確定できなかったことです。どの画も、ある地点を境に、住宅などの建物が無くなり確認できるのは、地面から少し出ている流された建物の基礎であろう残骸と、大きな屋敷の庭に配置されていたのであろう庭石などの巨大な重量物だけが不自然な形で残っているだけでした。こんな殺伐とした風景が、北は岩手県から南は今回走って来た福島県まで、続いているのだろうか？



この海岸線の平地で住んでいた人々は、どこまで逃げなければいけなかったのか？逃げ切れたのか？自分がいま目撃している現実と、これまで現地のことを全く知らずにテレビなどの映像などで情報を得ていた被災地に対する想像とが、全くリンクしませんでした。

車はさらに南下、海岸線の道路で駅の所在地を示す看板を何度も目撃しながら移動しました。しかし、駅やその付近にあったであろう駅前の小さな町は全く無くなっており、その姿はおろか、想像すらできません。ただ、今はない駅舎から、南北に続く長い直線の、線路を失った軌道を示す法面が延々と続いてました。



ある程度の距離を走ると、その地区に所在している小中学校が荒廃した土地の中から浮かび上がって来ます。それらの校舎は必ずと言っていいほど、不自然なくらい残骸が片付けられていていました。校舎の中には、震災当日、卒業式が行われていたことを示す掲示物や黒板に残された寄せ書きなどが書き残されていました。当日、子どもたちの楽しそうな歓声が、歌声が聞こえたであろうその証しが、廃墟と化した建物の中では不釣り合いな情景・絵として映りました。

残された校舎を見ると、たいして大きな損傷もなく以前の姿で残っており、その二階に上がって学校の周りを見渡してみると辺り一面、津波に流されていて何もかも、影も形も残ってなかった。



ふと考えると・・・どの学校も、その地区その地区の防災の基点になっていたはずで、震災以前から三陸沖地震が再三危惧されていた地域なので、普段、防災訓練については高度な訓練を行っていたのだと想像はできるが、一年前、果たしてその訓練は完全に、確実に機能したのだろうか・・・廃墟になった校舎のなかで、改めて人

間の無力感を悟らされた気がしました。

そして、今、思い出すと現地で人影を全くと言っていいほど見ることはなかった。今から十数年

前、私たちは間近で神戸淡路大震災を経験し、わたし自身も神戸の震災直後から、何度も足を運び被災地の人々と話をする機会がありましたが、大震災から一年後、東北の現地を訪れて実際に被災された人々と話をするにはおろか、姿すら見る事が出来なかった。

地域防災の拠点であったであろう校舎が大きく破損していないところから、神戸の震災の性格とは全く違い、津波という別の大きな要因が、甚大な被害の元凶だったという事実を改めて理解するとともに、同じ大震災と言う名の地震も神戸と東北の罹災を同類項として一括りするのは不可能なのだと確信しました。

訪問期間中、津波で流された被災地の現在の記録写真として、シャッターを切っている自分自身に嫌悪感を覚えたのを今も覚えています。立春を過ぎて、東北太平洋側特有の湿った雪でうっすら覆われた雪景色の中で、海岸線に至る所で積み上げられた瓦礫の山。震災被災地のベンチマークと化している瓦礫の山を目にするだけでも、一年間の復興に費やした時間がいたずらに浪費され、震災復興への諸問題は文字通り、“うずたかく山積みになされたがれき”のごとく処理されることなく停滞をおこしている、解決には程遠いだろう・・・それは廃墟となった現地の光景がすべてを物語っていると五感で実感しました。



そしてもうひとつ、決して忘れてはならないのが福島県の深刻な原発事故の後遺症の報告でした。福島県民、特に子を持つ親、そしてその子どもたちが、風評被害・とりわけ原発の放射能汚染の誤った情報に疲れ切っている様子を、福島県 PTA 連合会の皆さんから説明いただきました。



震災後の当初の劣悪な学校生活環境、そしてじわじわと確実に広まっていく福島県民への蔑視の眼差し、幾度とない国や自治体への環境改善の必死の陳情にも関わらず、全く進展のない行政の対応。そしてその無力感。

許される時間いっぱい、いっぱい使ったの福島県 PTA 会員の方々との懇談会での、溢れんばかりの辛い現状への訴えは、紙上などでは到底、感じ取れない現場の苦悩を聞くことができました。

その活動報告の一つに、保護者が、自主的に子供たちの安全な学校環境を作るべく除線活動をした話もありました。校内の運動場などの表土を削り取り汚染された土を運動場の片隅に固める作業で、一時的にその汚染土にブルーシートを被せて仮置きされたそうです。

そこで、自然発生した差別を伴った子供たちの遊びの一例が紹介され、それを聞いて私はびっくりしました。子どもたちはまず“遊び”としての“いじめ”を始めたというのです。ブルーシートをかけて、放射線の拡散を防ごうとしている汚染土の山の上に、誰かの持ち物を放り投げ、その子に取りに行かせるという“遊び”です。話のなかでは、「いじめ」と表現されていましたが、大人が「危険」「近寄るな」と言えば言うほど、そういう場を“遊び”にしてしまうのが子どもたち。



子どもたち以上に大人の「いじめ」はひどい。とても表現できないような福島県人に対する差別、「殺して地下に埋めろ」といったネットの書き込みや、福島県ナンバーの車に対しての落書きなど



のいたずら。福島県下の学校の部活動等で実際あった、「県外などの対外試合等の参加自粛の要請」等の話が、次々と紹介されました。そんな事を初めて聞いて、私は胸の底に大きな穴できて、涙がとめどなく流れ出るような感覚を覚えました。

国や行政の原発事故に対しての対応のまずさ、遅れなど、当事者である福島県民の方々の^{じくじ}忸怩たる思いと、これから何十年と続くこの事故の後遺症と、どのように向かい合い、そして付き合って生きていけるのか？

そして、限定された地域に対しての放射能汚染が、あたかも福島県全体の状況だと勘違いしている現在の国民の意識、見識にどうやって正確な現状と正確な情報を周知できるのでしょうか？

一年たっても被災地の人々が、光を見出せないことについて、同じ人間として今まで考えを共有できなかったことが、本当に恥ずかしかったことと、今回の東北訪問を機に、改めて私一個人でなく、現在進行形で活動させてもらっている PTA という活動の場で、いかに距離感なく今回の感じたことを発信できるかを真剣に皆さんと考えていきたいと思っています。



いつも・いつも思い出すのはおまえのこと

高槻市 P T A 山本幸生

訪問で強く感じた事は、復興がほとんど進んでいないということでした。トラックや重機ばかりが目立っていました。また、3月11日に家はもちろん無くなっていましたが、元あった場所に献花をされる姿があちこちで見られました。亡くなられた方にとって帰る家は、そこしかない。

そんな中、石巻市追悼式に参列しました。その式の中で合唱団が歌われた、「はるかな友」を聞いて胸が熱く感じました。

歌詞に「静かな夜更けに、いつも・いつも思い出すのはおまえのこと、おやすみ安らかに 【略】今宵もまた」遺族の方々にとってはまさしく「安らかに」と思われた事でしょう。この1年間亡くなられた方をいつも思い出され、この日安らかにと特に思われた事でしょう。みなさん色々な思いがあり、言葉で表すのは難しいですが。被災者でない私が言えるのは、本当に安らかに眠りください。



東北訪問

～何よりも忘れないでほしい。このような厳しい現実が今もあることを～

大阪府PTA事務局 姫野 國廣

見て、聞いて、五感で感じて

何をしたら震災にあった東北被災地の支援になるのか、悩み考え続けた一年間であった。ボランティアに参加したかったが、2度ほどのチャンスも生かせなかった。

今年度に入り、大阪府PTA協議会の「東北訪問団」募集の企画があった。すぐに手を挙げ、自分としての課題に進んで立ち向かいたいと思った。ただ、参加が決まっても、被災地の見学をしても良いのか、迷いはあった。

3月10日。仙台空港に降りて、車で海岸線に沿って走ると、がれきの山が延々と続いていた。震災以前は、きれいな海岸線が見る人を和ませていたであろう。この山々は雪をかぶりながらも、我々にせまってくる迫力があつた。また、道路の近くには、家の土台だけが残っている風景が続いている。



いくつかの小・中学校を見て回ったが、1・2階の廊下の窓が壊れ、2階までは津波がきたであろうと予想された。地震にあい、津波から必死で逃げたであろう子どもたちの姿を想像すると、本当に身の縮む思いがする。この日は、一日中雪が降り続いていた。

11日には、宮城県の北部海岸線を回った。石巻市では、海近くの町そのものが全て壊され、土台だけを残し、流されていた。また、横倒しに倒れている4階建てのビルがそのまま残っている町の跡があつた。その場に立ってみると、本当に言葉が出なかった。

午後には、石巻市追悼式に参列した。多くの犠牲者がでた市である。静かに進む式の中でも悲しみが会場を覆っているようでした。会場の出口で、全国各地から送られた花をいただいた。連帯の温かさを感じた。

12日は、宮城県の海岸線を回った。地形などによって被害の大きさが違うことも見られた。観光地の松島では、多くの島々が津波を減少させたようで、比較的被害が少なかったようだ。瑞巖寺も守られてこれからの観光に光がさすと思うと、ホッとした気持ちになる。



一年たった東北の現実を目にした。正直、表面上の見学にすぎないかもしれないが、この感じた東北の現実を伝え続けていきたい。

一人の人間として

私の原風景の一つにお寺の庭がある。小さい頃から、祖母からお寺によく連れて行かれたものです。

今回、伝統仏教の宗派でつくる全日本仏教会が「脱原発宣言」をした。『いのち』を脅かす原発への依存を減らし、原発に依らない持続可能なエネルギーによる社会の実現を目指します。誰かの犠牲の上に成り立つ豊かさを願うのではなく、個人の幸福が人類の福祉と調和する道を選ばねばなりません」と明言している。戦争中、多くの仏教者が口を閉ざしたことを反省し、今こそ原発問題で発信すべきだと言っている。



原発事故で故郷を離れざるを得ない人々を思えば、いのちの尊厳を唱えるものとして原発は持つてはいけないもの。生活のあり方を見直し、原発を必要としない社会を目指すべきでしょう。我々も、一人の人間として、原発問題を真摯に考え、思いを発信しなければならない。

現地 PTA との交流会 ～忘れないで、東北を～



2 日間にわたって、現地 PTA の方々との交流会を行っていただいた。10 日、11 日と最も忙しい日程の中で、我々訪問団に対応していただいた。

その中で、役員さんの明るさとバイタリティに驚きもし、頼もしくも感じた。この一年間は、それら役員さんにとっては大変な一年間であったのに、それを前向きにとらえ、行動

し、家族・仕事・PTA 活動のことを話してくれた。

その中で、いくつかの課題が出された。

- ①子どもたちの健康が心配であること。
- ②子どもたちの戸外活動が制限されていること。
- ③教育活動が厳しい環境の中で行われていること。
- ④放射能に対する教育を行ってほしいこと。



など等、たくさんの困難をまだ抱えていることが出された。地震に続き、津波そして、放射能の拡散。特に、子どもたちにとっては放射能により健康への影響が危惧される中、戸外活動が制限されている。活動盛んな児童・生徒にとっては、何よりもつらいことであろう。成長への悪い影響がでないように行政は全力を上げるべきである。また、いくつかの被災した学校が一つの学校に集まって、教育活動がされている厳しい教育環境が続いている。放射能による差別も現実にも起こっていると聞く。子どもを守る環境に日本全国を挙げて取り組むべきだと痛切に感じた。

そして、特に強調されたのは、「何よりも忘れないでほしい。このような厳しい現実が今もあることを」そして、「この厳しさが、長く続くであろう東北被災地を。」と、多くの方々から言われました。



これから、我々は息長く復興と向き合っていかななくてはならない。そして、この東北が元の姿に戻るだけでなく、この日本のすべての子どもたちが健やかに成長していくための手立てを講じていきたい。お互いに支え合えるような国の仕組みを作り、安心して暮らせる地域・町にすることが今回の東北の震災と原発事故を「忘れない」ということに

つながっていくことだろう。

我々PTA という子どもの成長にかかわるものとして、まずは子どもたちの声に耳を傾け、成長のために何ができるのかを考え、その実現のための努力を続けていきたい。

【編集後記】

参加者の“こころ”に多くの“おもい”が残った訪問となりました。私たちが少しでもできること、それは、記憶に留め忘れないことが大切であると。

そして、東北のみなさんのパワーに圧倒されながらも楽しい3日間でした。

【ご協力いただいたPTA連合会・協議会】



宮城県PTA連合会

〒983-0836 仙台市宮城野区幸町 4-5-1 宮城県青年会館内

tel/022-295-9581 fax/022-256-0425

<http://www.miyagi-pta.gr.jp>



仙台市PTA協議会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町 2-1-1

TEL 022-227-9545 022-227-9545 FAX 022-227-9218

<http://www.pta-sendai.gr.jp>



福島県PTA連合会

〒960-8153 福島市黒岩字田部屋 53-5 (県青少年会館内)

TEL : 024-545-5982 024-545-5982 FAX : 024-545-5990

<http://fukushimaken-pta.jp>

福島県国見町PTA連絡協議会

〒969-1731 福島県伊達郡国見町大字森山字西上野 20番地



大阪府PTA協議会
Vr.4.21.2

